

あはれ捕虜となりてハルビンに護送されぬ若し彼にして彼の事業成功すれば斯くも夥多の英靈を失はずしてしかも猶早く戦局を告げしならん。

殊に彼の憂國の志士は嘗て一度も軍隊生活をなしたる人にはあらざるも之れ所謂大和魂の凝固且つ其の精髓をあらはしたるなり

我等は彼等憂國の志士に鑑み益々忠君愛國の誠意を致したいと思ふのであります。

今は英魂に勳六等旭日章を送り靖國神社に祭つてあるのであります。

之から武士道と剣道、剣道と學生及軍隊の体操に付て講話致します。

武士道精神は我國特有のもので一種獨特の靈妙不可思議な精神であります。

此の偉大な精神を有形的無形的に教ふるものが劍術であります。

即ち氣力を練り膽力を養ひ以て盡忠報國の心を顯す

其他懇懇なる委細の講話を承りて後銃槍器機体操障害物飛び越え被服倉庫等を參觀し練兵場に至る。

茫々たる練兵場には彼處此處に教練行はれ散兵せるあり歩調とれるあり、不動の姿勢あり、劉曉たる喇叭の音のするあり、將校の指揮するあり、然も一糸紊れず一舉手一投足之れ皆整然流石は世界に冠たる氣鋭のつわものと思はれたり中隊教練及び中尉殿の機關銃操法及び機關銃の分解説明谷口少尉殿の電話架設及び説明等を承り午後四時頃と云ふに旅館に歸れり。

生等は一として軍隊生活の犯すべからざる壯嚴の念を抱かざるはなく我が精髓の顯はれたるにはいたく感にうたれて其の刺撃を受くるや筆紙のつくす所に非らず自ら己が心のおもしくなれるが如きを覺えたり折しも劉曉たる喇叭の音は響きわたりて生等が身の底までも徹するが如く一日も早く軍隊の教育を受け海ゆかば水漬く屍山行かば苔むす屍君の馬前に花と散らす心緒しばしも止めあへざりき。

のです。

ち義は山岳よりも重く死は鴻毛よりも軽く粉骨塵身撓まずして大和魂は劍道を以て確實に養成するを得るのです。

文夫禪の正氣の歌の如く又廣瀬中佐楠公の忠節の如く七生報國の精神を明かにするのです。

此精神は學生にも大切なもので國家の干城たる學生にして此の心なくんば國の運命は如何ともすべからざるに至るのです。

故に學生諸氏も大いに劍道を行ひ以て志氣を鼓舞し身心の健全を計るべく心掛けて頂きたいのです軍隊の体操は一は体育養生の爲め二は勇氣鼓吹の爲めに行ふので戦場に出ても辟易せざる頑丈なる体力を鍊り鍛へる爲めのものです。

故に何かにつけ活氣潑刺犯すべからざる嚴格の態度が籠つて居るのです。

非常に攻撃的進取的精神を重んじて居るのです。

嗚呼誰か軍隊生活の高く清く且つ美しく正と義と勇に凝れる美まざる者あるべき。

嗚呼劍の光り、喇叭の音、我がつわものに抗すべき敵はいづこにある。中村中尉殿より名物餅の寄贈を忝うし夜に入り茶話會を開けり。恰もよし我が彦中出身の先輩者たる中村中尉殿、谷口少尉殿、秋篠見習士官殿、宮崎彦一郎殿等十數名の御列席を仰ぎ盛況云ふばかりなく又同文書院付の宮崎彦一郎氏、高畑淺次郎氏、寺村中尉殿、谷口少尉殿、秋篠見習士官殿、藤川先生等の演説及び朴蒲山君の琵琶歌、菊多屋旅館寄附の蓄音機等あり。其の壯絶快絶言語に絶す。

實に生等は我が先輩諸氏の懇篤なる訓諭には感謝措く能はず言々句々よく腦裡に刻し肝に銘じ服膺以て違背せざらん事を期す。

第三日 拾六日歸校

午前一時頃より如何なりけん腹痛者を出し吐嘔するもの後には頭痛をも惹起して患者拾數人を出したり。先

生方の心配一方ならず夜を徹して看病なし給ひぬ生等は先生方の御手厚きには感涙するを止め得ざりき。實に父母よりいや高き御恵み子弟の關係濃く厚き誰か之れに及ぶべき。

夜あくるに至りても患者の痛み止みもやらず斯かる事にては歸校も覺はつかなく思はれ皆々憂の眉を顰め居たりしが誰が通知したりけん聯隊より患者を診察せんとの報を得、患者のみならず生等の一行の欣喜する所に如くものなく華陀扁鵲に遇ふの心地ぞしたりけり池田先生引率のもとに聯隊に行き軍醫の診察を受け且つ藥まで賜りぬ。

嗚呼手厚き慈愛に充てる聯隊には一掬の感涙に青衫を潤さる者あるべき。

生等こゝに聯隊の御厚志と憐愍の情に感謝して措く能はず殊に谷口少尉殿の一方ならざる多大の御斡旋には感謝し奉る。

之より病勢は漸次に快癒に趣き菊田屋前に自由解散し

午後一時發の汽車にて歸校すべく敦賀驛に集る様に命を受けた。

生等は松原に耕雲齋の碑にかしづき金が崎に新田を吊ひ吉備神社にありし物を偲び豫定の如く一時發の列車にて歸郷の途に着く。

嗚呼敦賀灣頭波靜かに金山おろし亦颯爽たり。

生等敦賀の地を離るれど面會の期近きにあり劍光凜然英姿堂々盡忠報國の誠を致し極力以て我が大君の爲に盡瘁せんとす。

修學旅行の記

第四學年生

古語に曰く「可愛い子には旅をさせよ」又曰く百聞は一見に如かず」と旅行の必要なる事明かならずや、蓋し其効たる枚舉に遑あらずと雖も、觀察力を精密にし見聞を廣くし智識を正確ならしめ思想を豊富ならしめ

或は不撓不屈の精神を養ふ事を得る等は其最大なるものなり。今や秋漸く深くして天高く馬肥ゆるの好時季にして、心氣爽快、野には黄金の波を寄せて我等の遊意を動かす事頻りなり。是豈に旅行の好時季にあらずや、此に我等四年級生四十九名は梅田、櫻井、金澤の三先生引率の下に樂しき旅行をなす事となりぬ、四年級の例年の修學旅行は主として大和、南海方面なりしかども本年は面目を一新して、山陰の裏日本探勝を主とする事と定まりぬ。其日程の發表せらるゝや余等の之を期待する事宛も大早に雲霓を望むに髣髴たりき。

十月十三日(第一日) 汽笛一聲金龜城を後に南を指して汽車動き出でぬ。時方に午前六時二十二分なり、車中談笑歡聲湧くが如し、窓外の絶景を稱するもあれば書を繙きて車中の徒然を慰むるもあり、喜色満面に溢れて宛然成功の旅路に赴くが如し。河瀬、能登川も束の間に通過す能登川驛を過ぐれば右に近く琵琶湖を望む。

腰越隧道の邊り信長の安土山あり、遺礎殘壘僅かに存して悲風空しく舊時の山河を吹き滿目蕭條たり。野州を過ぐる邊り、田原藤太秀郷の蜈蚣退治の傳説を以て有名なる三上山を東に望む、山容畧圓錐形をなす、近江富士の名を冠る亦宜なる哉山甚だ高からずと雖も其蒼翠温潤の風色絶えて他の湖上の禿山に似ず、姥ヶ餅を以て有名なる草子に至りて此より柘植に至る草津線の東南に走るを見る。

大津に至る間、汽車は數多の石山觀光客を收容し余等亦僅かに座席を有するに至る又起立するもあり、大津に至る頃今迄屢々出でゝは隠れ隠れては又出で、其姿を現はせし湖水の清漣湖山の風光更に新なり。

春は融蕩に秋は澄爽に朝陰を籠め夕暉を盪し浮嵐暖翠千萬の狀を呈し時として清ならざるなく處として奇ならざるなし。幾代の詩人徒に吟髭を捻斷して此の湖の晴好雨奇の景を道破する能はざるに泣くと、支那瀟湘八景に擬して選ばれたりてふ近江八景も、身車中に在

りては探るに由なく、あはれ此勝の片影をも覗ふ事を得ずして大津驛に着せり、此にて膳所中學校五年級生の余等と同じく修學旅行に赴くに遇ひ、其旅行地の何處なるを問へば、四國方面なりと答ふ彼等幸にして世界の絶景瀬戸内海の風光を探るを得るを思へば余等此を聞いて亦垂涎三尺たらざる能はざりき、東洋のヴェニスと稱讃せし能はざる湖山の風景絶美なる大津も車窓より只瞬間之を眺むるのみにして瞑想暫時「ささなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」此度が詠別に長等山亦悲痛の感を伴ふ、汽車は早くも逢坂山の隧道に入れり、上りなれば、汽車の喘ぐ響宛も苦悶の狀に似たり。出で、數分稻荷驛にて右に稻荷大明神を拜す。時宛も明神の遷宮式に當り參拜する人繼るが如し。京都近づけりとの聲に驚き急ぎ窓を排せば汽車は早くも鴨川の清流に掛れり、左に深草練兵場を望みて、先年都市連絡飛行中飛行器諸共墜落非業の死を遂げたる民間飛行家武石氏の空しく挫折せる英魂を吊ひ

京都驛に着す。汽車は少しく遅延して時は豫定の時間午前八時三十三分を過ぐる數分なり、乗換のため下車す。

古の平安朝京都なる眠るが如き東山の艶、西山の翠も出で、遊ぶに由なく歸途を楽しみて新舞鶴に向ひて山陰線に乗換ふ。

午前九時四十分京都發北を向ひて走り行く。

汽車は保津川の險流に沿ひて走る、水聲淙淙として心耳を清め、一場の明媚なる山水は幾里の間、窓外に連續す其間鐵路は河の右岸を縫ふかと見れば、左岸を走り、餘り高からぬ山は鐵路の兩例に迫りて、其屈曲、翠嵐の搖曳窓外の眺め實に筆紙のよく盡す所にあらず、僅か數刻の間無數の隧道ありて晝夜の別ある事幾何なるを知らず、凡そ此山隈水濤、櫻樹多く春閑なる頃、花爛漫として峰まきに燃えむとす、其流に沈む處、花氣水氣と相氣氤も夜も亦光ありと云ふ、今は即ち秋日漸く深くして、満山の樹葉、將に紅葉せんとし忽ち鳥聲松籟

本内地四軍港の一なれば、定めて宏壯なる停車場を有する殷賑なる市街と想ひしに事實は之に反し驛は粗末にして狭小なる木造の家たりしには一驚を喫せり、市街の狀態亦余等が期するが如きものにあらず、只數台の乗合自動車、舞鶴等と相互旅貨の輸送に疾驅するを見るを異とするのみ、然れ共、碁盤の目の如く市街を貫通する往還の幅の甚だ廣き事には彥根の如き兩側の家屋の檐端の將に接觸せんとふ道路に歩き慣れたる身には、何となく異様に感ぜられぬ。其れ同地が新開の市街たるを表するの証なるか、其道路の名の如きも南北に通するを端より順次に數へて一條二條と呼び東西に通するものを稱して悉く、日露役時代の我國の戦艦の名稱を附す、例へば、三笠通、初瀬、敷島、朝日通等と稱するが如きは新舞鶴たるの地をして、鎮守府の所在地たる事を表明するの極めて趣味ある命名法と云はん、ローカルカラー亦是等に面目躍如たり加之是等町の名を記憶し易き事は余等が住む彥根の町

も爲めに漸く赤からむとす。

河中に一隻の川舟の流に従ひて漕ぎ下るを見る狭中に石あり水之と闘ふて下る、舟子巧に一竿を操り舟を行る事箭よりも早く忽ち下流に下りて眼界を没し去る。

鐵輪の轉するに従ひ溪流の風光須臾にして百變す、京都より龜岡に至る間保津川中の奇峭なる斑岩は、九曲が寒水を相撃ち、千渦万渦滾々として相逐うて流る潭邊奇石怪巖重疊起伏して車窓よりの奇勝筆の及ばざるを恨む。明智光秀の本能寺襲撃の計畫成れりてふ、龜山城址の存する龜岡を後にして車中、沿道車窓の絶景を眺めつゝ晝饗を喫し午後十二時廿二分綾部に着す待つ事須臾にして舞鶴線に乗換え、汽聲長く餘韻を残して同四十分綾部を發す目的地の愈々近づけるを喜びつゝ談笑に時を過せば早舞鶴の聲に驚かされ、急ぎ下車の支度をする間も早く、舞鶴重砲兵大隊の營舎を左に見て、二ヶの短き隧道を越せば汽車は新舞鶴驛に入れるなり、時に午後一時十五分なり、余等は新舞鶴は日

名の複雑にして一々記憶するに至難なるに比して其便利なる事幾層倍なるや計り知られざる程なり、先づ余等の宿なる新鶴館に赴き手煩らしき手荷物を預け置き身を軽くして直ちに鎮守府に赴く、此日彦根を出發せし際は満空二碧瑠璃の如く澄み渡りて、面を拂ふ風は靜かに清き高秋の氣をもたらし身に込み込むが如き爽やかなる心地せしが、此地に來つれば空は重く曇りて太陽は直射せず、水蒸氣四邊を立て罩めて一陣の清風もなく、蒸暑くして心地惡しき事宛然梅雨季の如し油汗は皮膚の奥よりデクデクとはみ出で肌觸りの惡しき事亦云はん方なし、表裏日本の氣候が是の如く相違するものかと一驚を喫せざる能はざりき、海上を眺むれども當日は不思議にも、市街に面したる外灣の方に艦艇の片影だに望む能はず、森漫たる碧海に只眞朱に染られたる浮標の蕭然波のまにまに浮遊するを認むるのみ、常ならば數隻の軍艦、驅逐艦位は必ず碇泊し居るべきものなるに、今日如何したらん譯なりと怪しむ

つ、鎮守府に向ふ、明十四日は第一艦隊が旗艦河内を先頭に艦艇大小數十隻入港するとの事にて、道路には兩側の家より萬國國旗、提燈の類を蜘蛛の巣の如く引き廻らして市街の盛裝して艦隊を歓迎するに忙はしげなるを眺めつつ三町にして衛門に達す、衛門には歩哨佇立して出入を嚴にし此も通過する者も一舉一動を監視す如何なる者と雖も此通過するには必ず相當の敬禮をなさざる可からず。

遂に鎮守府構内に入る一條の坦々たる大道路は構内を貫通して走れり、天長節など特別の祝賀日に際しては此道路を開放して通抜けを許可する事あり、行く事二町計り其右側には嚴重なる煉瓦造りの倉庫數棟並立するを見右側には、未だ上衣下袴共に白色の夏服を着けたる一隊の水兵の盛に、實彈射撃の演習をなせるを見たり、反響を聞くのみ、更に進む事三町許、右に經理部を眺め、其傍に見島艦を見たり、此日此内灣に碇泊せる軍艦は、前記見島の外、三笠及マストの折れたる

日進艦及其他に破損せるもの二を見たり、三笠艦首の菊花御紋章は金光燦として折柄の夕陽に反映し巍然として泰山の如き艦客に威嚴を加ふる事幾何なるを知らず、海兵團に達す、鎮守府見學の事に付交渉中、此に待つ事暫時、折しも新任長八代海軍中將閣下の巡視せらるゝに遇ひ、海兵團音楽隊は爲めに、囀鳴たる音楽を奏し、余等は其妙音に魂飛び、膽浮ぶの感あり、暫し恍惚たりき、閣下は其間終始舉手の禮を施されつつあるを見たりき、閣下は彦根出身なる三須中將（當時の）の後任なり。遂に二名の海兵團員の案内にて軍艦三笠の見學に赴く、計らざりき今日、我が三笠の海を壓する艦影に遇ひ且之を見舞はんとは、三笠は日露役當時第一艦隊の旗艦として奮戦力闘以て皇國海軍の今日ある所以の一端を開くに與りて名譽あり光榮ある軍艦なるなり。

吾人亦此榮譽の高き軍艦を親しく訪ふを得たる幸甚にあらずや、海兵團より岸に近く碇泊せる三笠艦に至る

迄途中數多の工場ありしが、其儘素通して直ちに艦に達す陸より同艦の左舷に達する間、船を浮べて其上に板を渡し以て連絡を計れり、其間數間に過ぎず、艦尾に「みかさ」の三文字平假名にて、銅を以て記されたり、金色燦として眩目す、既にして余等は甲板の上の人となるに一萬有五千噸の排水量を有する同艦は堂々として宛も大厦高樓に居る如く、差些の動搖をも感せず彼の浮城の古言我を欺かずと思へり、十二時砲は前後に各二門宛備はり其巨大なる砲身の下には日露戦役當時の海戦に各々偉大なる効果を奏せし事を證明するの文字、宛も戦功を語りて誇り顔なり、かくて吾等が隊を三分せられ各一名宛の水兵を案内に附せられ艦の巡覽に赴きぬ、此日同艦にては、發電機に故障ありてか常ならば點火すべき艦内の電燈も多く點火せられず爲めに日光の十分射入せざる室は薄暗き事甚だしくして足許に留意せずんば將に躓き顛倒せんとせし事も屢々なりき。吾人は案内水兵の後に従ひ行くのみにして、

艦内數多の室を通りしも一一記憶せず、艦内一体に行き渡れる、天井の片隅にある數多の細孔を有する太き鐵管を何ぞと問へば通風器なりと云ふ、夏日炎暑下に各室の空氣漸く蒸暑くならむとするの時電動力にて一大扇風機を廻轉し此の鐵管を通じて各室に空氣（即ち風）を送りて以て、幾分の換氣法を行ふと同時に涼味を與へるものなりと云ふ、内部に入れば、一種異様な臭氣は鼻を襲ひて、此の臭に慣れざる吾人は漸く頭痛を感じしむるに至れり。

六吋以下の數門の砲は各々艦側より出でたり、使用せざる時は銹蝕を防ぐ爲ズツ製の被を掛けられたり、艦内の整頓せる事實に驚く許りなり、一室に異様な箱ありて錠を下されたり、之れを罰金箱と云ふ、甲板士官終始艦内を巡視して兵卒の物品を其儘放置するものあらば其何たるを問はず直ちに沒收して此の箱の中に投入す、而て一週間毎に此を開きて沒收せる物品を各持主に返還し其罰金として一品につき金貳錢宛徴收

し斯して兵卒の放縱に走るを誡め、以て嚴なる規律的生活をなさしめ些の放逸を許さずと、生れて始めて軍艦てふものの内部を見るを得たる余等には見る物一として異ならざる無く、聞くもの一として奇ならざるは無きなり、太陽の光線薄暗き幾多の水兵室の傍を通りては、或は書を読むの水兵あり、手紙を認むるの水兵あり、立つあり、坐するあり、はた熟睡するありて其無邪氣にして平和なる、彼の日本海に猛戦して壯烈鬼神を泣かしめ、露兵をして膽寒からしめたる勇士かと異しみたり、艦長室に導かれぬ、時の艦長は伊知地大佐なるも艦長室にはあらざりき、設備の壯麗なる事實に宮殿の如し、室はさまで廣からざれども其設備の華麗なる事人目を眩耀せんとす、窓前に一の小さな精巧なる砲あり、ケビン砲と云ふ、戦時等萬一の場合に使用するものなりと、次いで上甲板に導かれ司令塔に入りぬ眺むれば全灣の風景双眉の間に集り小汽艇波を蹴つて海上を縦横に疾驅す、一端艇の頻りに漕法を練習せる

を見たり、明十四日第一艦隊入港記念に端艇競争會を開催する故其練習なりと云ふ、司令塔は極めて厚き鋼鐵板を以て圍まれたり、是の如きものは全艦中、此司令塔と無線電信器を收容するの室とのみなり、余等は此司令塔に入りて往年の激烈なりし日露海戦に於ける此艦の名譽ある奮闘を回想し而して想起しぬ、世界海戦史上に特筆大書すべき曠古の大海戦日本海海戦を、當時三笠は實に旗艦たりしなり、余等が崇拜措く能はざる東郷大將は余等が今在る此司令塔にありしなり、床上の彈痕是れ何物ぞ、忠烈無比の將軍、彈雨の下に此處に立たれしなり、巨彈果然將軍の脚下に爆破して、

しかも身には微傷だに負はざりしと、此砲彈の痕は當時の戦功を語り、殘虐の砲彈も忠義の身には避けて通るものと感じたり、此の彈痕をトーゴーホール (Togo Hole) と命名せられ其傍には當時の戦況を記されたり司令塔に隣して極めて重大なる一室ありこは全艦のあらゆる機關の中樞部にして、之を通じて總て命令を下

す事を得と、カッターと稱する極めて大なる艦載端艇はオールも整然備はりて、一朝艦の運命に危機を來すが如き場合の用ある時は直に綱を以て容易に海上に引下さるる様になれり、平常にても之を用ふる事あり、是にて大体の見學終り再び元の中甲板に導き還されぬ休憩暫時にして、遂に余等は此勇姿を辭して陸の人となりぬ、仔細に檢すれば艦側の鋼鐵板にも數多の彈痕あり、如何に當時の戦役の猛なりしかを察するに餘あり。

夕陽將に西山に沒せんとして、日漸く黄昏に近付きければ急ぎて元來し道を市街にと取りぬ、市街に入れば燈火の影煌き始めぬ、大門通三條角なる新舞鶴館に歸りしは薄暮に垂んたる時なりき、急ぎ疲れし旅装を解き、身を寛ぎて風呂に入れば骨身を抜かれ五体溶くるが如き感して、心氣清爽たり、夜に入れば秋天玲瓏一片の雲もなく、限り無く汗え渡りたる秋の夜の蒼空を貫きて影淡き銀河中天に横はり折柄の銀盤の如き秋月

輝き渡りて青白き光を投ぐる街頭の孤燈と清く市街を相照す何ぞその幽麗にして、其の高雅且詩的なる、晚餐後、三三五五打連れて市街に散策を試みるものあり或は連りに繪葉書に鉛筆を走らせて、楽しき旅の音信をなすもあり、新舞鶴てふ處は夜の散策を試みても別に見るべき物も無けれども、洋食店數軒あり洋品店亦散在し彦根よりは遙かに開けたるの觀あり、秋の夜もやうやう更けて點檢濟みて、冷き旅の衾の上に靜かに身を横へしは十一時頃なりき親友互に抱き合ひて今日の旅路の樂しかりし事を語りつゝある間に、旅の疲勞は眼を襲ひて、何時しか身は安らけき夢路に入り月影清き秋の夜を何處に夢の飛ぶ事ならむ。

十月十四日(第二日)火曜

午前六時起床と云ふに早くも五時頃に床を離れ洗面所の賑ひ一入なり、往還に出で見て、霧の深きに驚かさぬ、廿間も無き向ひ側の家の姿否影さへ見えぬ程なり。

工廠に通勤するなる職工の黒き姿は、繪の如く霧の中に現はれ忽ち霧の中に隱る白き幻の中を黒き影繪の如きもの、走馬燈の廻る如く動き行く様誠に面白し、東の空己に睫を開きて淡き曙光は深き霧の間を通じて四邊漸く白み行き往還の人通漸く繁くなり行きぬ、本日の豫定は午前中鎮守府を參觀して午後は宮津に向ふ筈なり、日漸く高く昇るに従ひ霧次第に散すれども尙町餘の先は模糊たり。午前八時三十分新舞鶴館出發鎮守府に向ふ。

本日は愈第一艦隊の勇姿を迎ふる事とて、市人亦其歡迎の準備おさ／＼怠り無く、町も盛裝を新にして珍客を待てり、余等は聞きたり、本日第一艦隊の入港の爲め市場の物價大に騰貴せりと、其入港の町に影響するの如何に大なるかは推して知るべし、昨日と同様の道路に沿ひ海兵團に至る面會所待つ事暫時なり、其間新兵の教練を見る、余等か一年級にて兵式体操の教練を受くると同一なり、驅足の方角變換廻れ右前進めな

ど頻りに熱心に各箇教練をなしつゝありき、古參水兵らしき者十人位宛分擔して頻りに要領を教へつゝありき、練兵場の一隅に一小水雷艇あり「明治二十七八年戰役威海衛總攻撃參加、舊十八號水雷艇」と記され露天に陳列されたり之れに徴して以て現今如何に我水雷艇の發達せるかを知るに足る、一水兵の案内にて海軍工廠に赴く昨日素通りせし工場も一通りは概畧觀るを得たり、但し秘密機械の製造工場に入るを許さざりき例へば水雷製作所などは、其表より覗ひしのみ、諸大機械の運轉するにつれ轟々たる大音響は耳を襲する許りなり、木工場に至つては、直徑數尺長さ數丈もある大木材も迅雷の勢にて廻轉せる圓形の鋸に觸るれば忽ち縱横自在に切斷せられ切開せられ任意の厚さの板となる。是れ實に數瞬間なり、彼の大鋸を用ひて、一度宛鋸を上下して木材を輓くに比すれば其勢力の點に於て、時間の點に於て、あらゆる方面に於て頗る文明的なり。發電所にては、軍港全部に供給する、燈火、動

力用其の電氣を起しつゝあり、機械工場にては數多の巨大なる機械を製作しつゝあり其規模の宏大なる音響の甚大なる吾人の心膽をして寒かしむ、電氣工場にては機械万般電氣の作用によりて巧妙なる製作をなしつゝありき、次ぎて先年浦波、綾波、磯波の驅逐艦の製造進水せられし船臺を右に見つゝ、船渠に至る。

船渠は總計三ヶあり、小なるより大なるに順次並列せり、余等の赴きし際は最小なる船渠には、水雷艇一隻中央のには驅逐艦二隻入渠せり、第三のものは是れぞ東洋第一の大船渠にして四年前の起工に係るも未だ完成せずと、流石東洋第一と稱せらるゝ丈ありて、上方より船渠の下底を俯瞰すれば底に働く人間の姿誠に小さく黒子の如し。完成の曉には優に三万噸級の戰艦を收容し得と云ふ。余等が見し時には船渠の門を製作中なりき是にて、工廠の見學終り海兵團への歸途に就かんせし頃午前十時、海兵團の入港を報ずる號砲と共に第一艦隊は旗艦河内を先頭に威風堂々艦體大小數

十隻を従へて入港碇泊せり、余等亦之等の勇姿を眺めんと頗りに海上を伺ひたれど、誠に遺憾乍ら濃霧海上を立て置め僅かに河内外二三の鼠色長大なる艦の片影を模糊の中に認むるのみ、常ならば海兵團よりは明らかに眺望を恣にするを得べけれど悲しい哉本日は濃霧に妨げられて髣髴たる片影を認むるのみ、海兵團に至る海兵團は即ち海兵を養成するの所にして兵舎四を設へ雪中練兵場ありて雨天及雪中の教練に用ふ、中に陸戦隊用の野砲二門を備ふ。

別に運用術雛形庫ありて、内に軍艦水雷等の雛形を備へ夫夫解剖して海兵團の兵士に夫々の各部の名稱構造及其に附屬する智識を授く余等が赴きし際は一教室にて水雷の雛形を教授中なりき學校生徒が教師より講義を授かるゝ大差なし、二名の教官頻りに黒板に圖解して懇切に教授しつゝありき。是等に續きて、消火器の倉庫あり、蒸氣ポンプ、手押ポンプ等の消火器を備ふ次いで軍樂隊教練場に至る三十名程の樂手は軍樂長の手に

携へたる一小竿に従つて種々の樂器を奏し嘯唳たる音樂湧くが如く心酔ひて覺へず恍惚として、立去るに忍びざらしめ案内兵の數度の催促に澁々歩を移したるが如きは笑止なりき汽車の發車時間迫りければ蒼皇海兵團を辭し新舞鶴驛に至る、市中の賑ひ一入なり、急ぎ停車場に着けば汽車將に發せんとするなり、辛うじて乗車するを得て新舞鶴を發す、車中十數分間、汗を拭ふ間もなく舞鶴に下車しぬ、舞鶴は田邊氏の城下にして舊時の舞鶴城今は石垣のみ空しく存して當時の面影を語り内に、白聖に染めたる木造の女神舞鶴を右手に翳すの像あり、今舞鶴公園と稱せらる、驛より海舞鶴驛まで約十五丁なり、海舞鶴にて鐵道院の連絡船なる第二橋立丸に乗船して宮津に向ひて出帆しぬ、時正に午後〇時二十三分なり、舞鶴を出でし頃は風死して波なく海上極めて平穩、秋風面を拂ひて心氣極めて爽快なりしが灣口に近づくに従ひ風雲危く波次第に烈しく舩を打ち始む、出帆後三十分許りの所にて本日午前新舞鶴

に入港碇泊せし第一艦隊の勇姿を遠望するを得たり、只二三の艦艦を見得しのみにして、殘は皆嶋影に隠れて數十條の黒煙細く天に漲れるを認めたるのみなり、此頃より暗慘たりし空は遂に雨を降して漸く烈しく甲板上にありし者皆船室に入れり、與謝灣を航行する際驅逐艦朝霧及水雷艇二隻の水雷發射演習を行へるを見たり、船次第に宮津に近づけば右に當りて、万松一路一字碧水の上に描き、長州海波に映じて、蒼松一帶鬱蒼畫の如く細く海面に浮べるものは松島、嚴島と共に皇國の三景と稱せらる、丹後の天の橋立にあらずや、晝夜陰晴、春霞冬雪皆この景を粧ひ二十四節悉く其美を異にすと云ふ。

遂に宮津に着船舞鶴を出でしより此間一時四十分正に二時を過ぐる十分なり細雨蕭條たる間を宮津に上陸す、宮津は松平氏の舊城下宮津灣に臨み三面皆山を以て擁せられ天の橋立其前面に見ゆ、遊覽の客常に來りて賑かなり。本町筆屋と云ふに投宿す、本日は最早

橋立を遊覽するに餘裕少ければとて其の儘自由解散をせられ各自三々五々打連れて、海濱に出づるもあれば宮津中學校を訪れるもあり、思ひ思ひの散策に旅の徒然を慰む、宮津中學校を訪れし一隊は余等四年級選手を出して、宮津中學の野球試合を行はんと申出でしも宮津中學校は最早放課後にて選手居らず已むなく止む。

夜に入れば、雨愈々烈しく、徒然のまゝ筆屋の樓上に一大茶話會を開催す、先づ梅田先生開會の辭を述べられ其巧みな吟詩を筆頭に、快談續出し、松林君薩摩琵琶石重丸の悲痛なる一節に袖を絞り、中道君の流暢なる英語の歌、山田君の間髪を容れざる即席演說等に、何れも十二分の歡を盡し、明朝の天橋遊覽を楽しみて降り續く蕭々たる秋雨の淋しき響を枕頭に聞きつゝ何時しか深き夢路に入る。

第三日目(拾五日)

目覺むれば雨なり戸外は寂として人氣なく、軒を打つ

雫の音最も物淋し。朝飯を喫し、外套にてかたく身をかためて出づ。雨の橋立も探らんとするなり。行く行く道の、家は未だ戸を閉し、雨繁くして、路上人影なく、軋る車の音何地よりともなく聞ゆ、さひれたる秋の日なりけり。

凡そ行くこと半里、雨止みたり。小兒の相携へて登校するを見たり、未だ八時ならざるべし。

橋立の崎少しく切れたるあり。間に流あり。

船場に一人壹錢、車はいくら何はいくらと明細しありぬ。橋立に入れば何となく仙境にでも入りたる如く感ぜられ、心自ら正しくなるもおかしからずや。

實に一里にも餘るなるべし、行けどもくつきず、其の間、地は眞砂の美しきにて仰げば、老松高く緑を擎げ、右に左に、森々たる海水、折から吹き来る潮風に或は高く又底く、寄せては反し反しては又押しよする實に自然の風光は絶えずして、天晴國內唯一の桃源とこそ覺えぬ。

成相山と云ふは、山さしたる緑にも非ず、然れど坂險しくして容易に攀づべからず。休息すること、十數度漸くにして頂に達す。山は、天橋を賞するに最も良く股覗きを以て名あり。蓋し、石上に登りて股より覗へば天橋の妙、至れり盡くせりと云ふ也。

馬鹿氣たる様な事にて眞面目になれざらども、誠に其の勝は、平望するに百倍せり面白き事を考へたるものなり。途上晝飯を終り、又汽船にて舞鶴に歸る、航路海やうやく荒れて、船は太く動揺して止まず。嘔吐するもの數人。山の人は海に弱きものなり。

舞鶴を發して大阪に着きしは午後八時頃と覺ゆ、其の間數時間、乗りづめの事とて、ほとく汽車にもあきぬ。外の景色を眺むるより内にありて睡らんと勉むるに専心なり。

福知山にて夕食を求め各自車中にて喫せしも動揺の爲思ふまゝならず文明の利器も有難からず。

食事也十分に取れざる也。

旅は憂きものとは誰が咏じけん。昔も今も同じ事何の旅が樂しきものかは。

ブラットホームに着きし時嘗て我校に在りて柔道を受持たれし大矢寧明先生に會ひぬ。

先生は校を辭してより當地に來たられしが、我等の來坂を知りて來り給へる也。

脊廣に烏打の輕装にて溢るゝばかりの笑を浮べ靜かなる我等を迎へられし先生の姿を見て昔も變らぬ師の恩の厚きを感じぬ。

先生の案内にて構内を出で電車にて直駛し定めの宿に入りぬ。宿は八軒屋に在り大和屋といふ也。

第四日(拾六日)

押し照しや難波の名は皇祖東征の御時浪波と言ひ給ひしに始まり景行帝の御宇に御津の濱と呼び、後大江の坂と改め更に大阪と云ふに至れる也。

應神天皇の大隅の宮、仁德天皇の高津の聖慮は仰ぐも賢し後太閤この地に居城を卜し施政の中心となるや

般賑益々加はり、明治大正の今日船舶の良港交通の要衝に居り外人は東洋のマンチエスターと稱し邦人亦煙の都水の都と云ふ。大厦高樓軒を列ね會社工場其の數を知らず渠溝縱横し、鐵路交錯し文明の利器一として備はらざるなし。東の首都とならび稱せらるゝもの此の地ををいて他に有らず。

今朝まだきに起き出で急ぎ見學にと出で立つ、第一に目指せしは造幣局なり、幸宿より遠からず徒歩にて出で天満橋を渡り、右に折れて行く事暫く、天下有數の大建築物を見るその巍然たる間はすして造幣局なるを知る。

局前すでに學校生徒の待つあり。案内につれて見るべきは限なく見るを得たり。たゞ憾むらくはその複雑にして又其の精細緻密なる一見せしのみにては殆んど記憶すべからざるを。

金貨の數々、銀貨の數々、其の量の大なると、其の扱ひ方の無造作なるとに驚けり天下最有力の金錢も、一

つの土塊に異ならず、スクウテはうる様石炭を扱ふが如く、拾つてはうる様石を扱ふに異ならず、たほげさなる事共なり。

局外に出で、仰げば、大烟突高く天に冲し、黒烟濛々たり盛なる哉。

こゝを去りて大阪城趾に向ふ北部土町にあり。階行社砲兵工廠皆其の周圍に在り。城は豊公一代の心血を注ぎし難攻不落の名城たりしが、元和の役戊辰の變に其大半は灰燼に飯し今は只牙城を存するのみ。

師團司令部上水貯水池等其内にあり、本丸の切石の如き石厓の如き、其の絶大なるに看る者をして驚倒せしむ上り見れば四界廣莫市の内外均しく一眸にあり。

林の如き大小の煙突は濛々として黒烟を天に漲らし天日も望むべからず。

直ちに砲兵工廠に至る筈なりしも折悪しく祭日の事とて見る能はず方向を變じて天王寺に向ふ、蓋し明治記念博覽會場なればなり。

明治の名残を惜む忠良の隈なく、歩き見ては衷情堪へがたく思はずも目をしばたゞく様いじらしくも哀れなり。見るもの聞くもの一つとして思出での種ならぬはなし、となりて乃木館あり。皆精神修養の良資料なり。彼の殉死當時の血痕を存する毛布の如き夫人着用の衣類の襟あたりは剩へ劍の爲にはころびあるが如き就中吾人の頭腦に大刺戟を與へ思はず雨把に汗す。又雨となりぬ我等はこゝにて自由解散をなし、各々其の觀を致しぬ。隣りて新世界の見るべきありルナパークの遊ぶべきあり。只憾むらくは晴天ならざるのみ。

第五日(十七日)

昨夜より降り續きたる雨は今朝も尙やまで降りに降りにき。雨の旅とや此を云ふらむ。初めてより未だ一度も雨なきは非らざる也。

軌道に沿ひて王子に至りぬ。法隆寺に向はんとするなり。

王子より法隆寺村に到る凡そ一里有半雨は漸く止みぬ

れど路は山なり畦なり。地は深泥其の極に達し、恰も水田を歩するが如く、泥中に没せんとせしと一再ならず村に着きし頃は頭上ゆげを出し、背に汗又甚し其の困難推して知るべし。

「この村はきぬたも法の響かな」とは誰が咏じけん。實は空吹く風も異つて佛草深く生繁り里行く人の面までも香の匂す。

太子御入寂の夢殿今も異ならず構造宏大内に仁王の天地を睥睨するあり運慶湛慶の作なり。

門を入れば五重塔、金堂、大講堂、鐘樓等の七堂伽藍ありて千餘年以前の建築物たりと稱す。蓋し推古式にして、其の美なる其の巧なる其の精なる目も眩すばかりなり。寶物陳列場にある幾十の佛像、幾百の百萬塔皆星霜を経ること千百の昔而も今日尙依然として存す當時の建築術の進歩發達を思ひ遣るべき也。

其れより又汽車にて奈良に入る宿は猿澤池近き大文字屋なり。この地は其の上元明帝より七代、七十餘年の間

帝都のありし所とて流石に其の趣、他都市と異なり優雅の感自ら起る、春日神社、興福寺、東大寺、南圓堂北圓堂、大佛殿、皆見るべきなり。案内に導びかれ、こゝかしこに古跡名所を訪ふに、折から鹿、式あるどかにて人出多かりき。春日神社一周して、大佛にいたらんとせし頃又雨となりぬ。雨中悠々濶歩して大佛殿に到る殿は其修繕昨今全くなりて高く雲井に聳え、まづ見る者をして驚かしむ。像は五丈三尺五寸端然として趺坐し邊を拂つて美なり、雄なり、偉なり、其他小佛の数々、金色燦爛として一種の美觀なり。

帝室博物館に行き、雨の止むを待つ事良久し。而も小降りにもなる様子なし遂に馳せり歸る。

雨中を逍遙すれば夜の舊都は、もの淋しく、滴々の音蕭々たり。猿澤池邊水は靜にして、塔影湖心に映せず徒らに電燈の爛々として輝くも哀れなり。

國破れて山河ありとや云ひけん。あゝ奈良の都も荒れぬ。我が逍遙も今夜が最期かこれ何の對照ぞや。

第六日目(十八日)

九二

衆に驚かされて目覺め起き出で、朝のつとめを終り、朝食後装束を整へ旅館を去つて奈良驛に至る途に車中のひととなり、宇治に向ふ東太寺のいらか高く雲井に聳え我が一行を送るが如く畦畔の草木は一行を迎ふるが如し。間もなく宇治驛に下車し徒歩して平等院に至る前方に清水淙々として見るもすが／＼しき大河あり、堤上より四方を眺むれば精神一入爽快なり堤上に休すること暫くありて遂に歸路につき再び車中に飛び入り桃山御陵參詣の爲桃山驛に汽車を止む、驛より御陵に至る間は廣き黄色の土砂をもて近頃造られたる新道にして土砂未だ固まらず小礫道傍に散在す。

停車場より暫くの間は道路の兩側には數奇屋軒を並べ數多御陵明治天皇、乃木將軍の畫はがき其他掛物等を販賣するありき。御陵は驛より數町の所にあり。

白木造りの二重の玉垣を周らして其の奥の一段の高地に砂をうづ高く盛れる山形をなすこれぞ御歴代の天皇

中稀に見る聖天子にして殊に智勇兼備し給ひ維新以來僅々四拾年間に我が國を文明に導き更に進んで名聲赫々たる世界一等國の班に加り列強をして驚歎措く能はざらしめ給ひし明治天皇の梓宮を安置せしものなり。其の神々しさ名狀すべからず。男女老幼貧富貴賤の別を問はず相混じて參詣する者絶ゆるなく御陵の前にひざまづき尊敬の念潮の如く湧出せしむるは實に天皇御在位中の御威徳のしからしむる所なり。

桃山驛近くにて各中食を終り後京都に赴き下車したけれど時なきを如何とする能はず残り惜くも見物せずして遂に戀しき彦根城下に向つて車を馳らせたり。

(終り)

賤ヶ岳修學旅行記

第三學年 山本 三 郎

曇がちなる仲秋の、十八日の朝まだき、午前七時吾等同級生は各先生引率の下に東海線車中のひととなりぬ

行方は何處か白波の、打寄す岸邊の飯の浦、余呉の浦邊の賤ヶ嶽、羽柴、柴田の古戰場、品はんとの旅行なり。

一團の黒煙をプラツトホームに残しつ汽車は今しも停車場を去るなり。オー我が懐しき城山よ、さらば暫し別れんかし。

七時四十分米原に至りて列車は北陸線に入りぬ。駛すること數分、煙は早くも天の川に横はりて、長濱も近くなりぬ。秀吉の居城は何處と問へども答ふる者はあらず、彼來り、此去り、吾が待ちにける木の本へ八時二十分に到着したる。

雨を冒して進む。大音村を過ぎ右手に伊香立神社を拜しつゝ目ざす古戦場の麓に至りぬ。踴躍一番、羊腸の峻坂を攀づる事半里、登るにつれ萬象の變化實に愛すべし。今日は時雨にて袖重く、歩行に苦しみ、汗背に流るれど頂上に近づくに従ひ風氣冷かに身に迫り、幽草漸く疎となりき。

登りつむれば我等が前に展開せられたるは、之ぞ琵琶湖の一角にて湖の美麗なる事、形容に詞なき風色は、忽如として余等の双眸に入る。宛然、老狐にして湖面を走らば、人馬水上に往來するを得る者の如く、あはれ磨き澄きたる鏡の面には、如何に美はしき色彩のうつりたるか、如何に花やかなる錦繡の織り出されたるか、而かも四方森として一鳥の囀るなく、一魚の躍るなく、一帆の影だになし。

吁美なる哉、幽なる哉、この時秋風横さまに吹き來り一段の風趣を添へぬ、嗚呼さても晴波數十里、一鏡を磨ぐ實に風光明媚、山水秀麗の語は、此所より出でたるやと疑ふ。この時余憶へらく、等しく水の蓄積したるものなれど、其の趣に於て海洋は雄大にして湖水は纖巧なり。吾人は海洋の雄大なるを好むと共に湖水の纖巧なるも亦愛すべきなり、と。

四圍山又山、水又水、湖面は澄みて近き山の緑を浮べ遠き山は霞みて水と共に藍を流す、吁、この間に於け

る崇高の美は、口あるも以て語るを得ず、筆あるも以て記す能はざるなり。湖水の自然美、實に無盡藏と云ふべし。

行く事二町ばかり、此處ぞ三百有餘年の其の以前、千古の快男子豊臣秀吉が北國の猛將柴田勝家と鎬を削り龍虎相争ひし所なり。

天正十一年秀吉兵七万餘騎を率ゐ、長濱城に柴田勝豊を降し、壘を天神山に築き丹羽長秀をして守らしむ。

三月九日、勝家は中打尾山、前田利家は別所山、佐久間盛政は行市山に據り天神山に對す。

四月一日秀吉天神山なる壘を、堂木山に移し、諸將を配置せり、同月二十一日盛政尾野道山、清水谷より鉢峯に至り、賤嶽を攻めんとせしも、秀吉來ると聞き退く。質明、秀吉、黒田(地名)、觀音坂を進み盛政を追撃し、猿か馬場に至る、此時、退却軍の殿將は柴田勝政なり、盛政の命により飯坂に戦ひしが、秀吉之を見て盛に攻撃せしめたり。時に七本槍、三振太刀の拔群

の軍功ありたるなり。

盛政支ふる能はず、前田隊と會して逃る、機を見て秀吉總攻撃をなす。矢叫び、駒いななき、劍戟響き、峯を包みて屍は山をなし、鮮血は流れて川をなし、かくて賤ヶ嶽合戦の幕は閉ぢたるなり。吁壯なる哉、くくフト我にかへれば秀吉なく、勝家なく、盛政なく七槍なく、三太刀なく、死屍なく、鮮血の跡もなし。唯一基の紀念碑、當年の名残りを留めて、寂莫として荒草の中に立ち、亂雲の中より射る太陽の影冷かなり嗚呼、山は依然たるも、當年の英雄逝いて返らず、茲に三百有餘年、吾れ徒に懷古の涙に咽び未死の魂を弔ひき、夢なれや、人生の春、荒れて芳草徒に全盛の名残りを留め、花落ちて鳥空し。吁此の時、時雨の裡に鳴く一鳥。

約二町下れば、おやみし雨は、思ひ出でたるが如く、又降り出でぬ。吾等は急ぎ晝猶暗き木立の影に身を寄せつ、百歳の大杉、空に聳え幹には注連縄引きたる神

木の下にて饑ゐたる腹を癒しぬ。

午後一時雨を冒して大岩山に中川清秀の墓を弔ふ。武士の草むす屍年經りて、秋風寒き此處、昔を憶へば悲風千里より來り、荒墳に英雄を弔へば、零露長へに冷かに其人なしと雖も、忠烈義烈の爲めに、豊臣家の護國の鬼となりたる、其の名は竹帛に垂れ、後世忠士の龜鑑たり。余幾たびか古碑を撫すれども遂に碑語らず地下の忠臣果して何をか夢みむ。

こゝに來る途中、一基の俳句塚ありたれど深くその由來を知らねば爰には略さつ。

猶、泥濘深き中を下る事數町、余吳湖次第に展開し行く。時しも沛然たる驟雨晴れ、太陽は樹下の梢を射て鮮に、點滴黄金の玉を落せり。間もあらせず、天には黒雲の影を絶ち、湖には太陽明に、遙かなる東の空には奇しき七彩の虹橋を架く。我等は暫し、此の佳景に見惚れつゝ半時にして、麓なる坂口村に着したるが、先づ菊水飴てふを賣る店に憩ふ。此の家の飴は古來幾

多の行旅をして賞味せしめたる物なりとぞ聞く。

午後二時半阪口村を發して木之本の延命地藏尊堂に至る午後三時半一同は再び車中の人となり。かくて文明の利器に運ばれて、青田、緑山を、或は迎へ、或は送り約一時間にして吾か彦陽の地も近くなりぬ。

金龜の城は睦しく吾を迎へ琵琶の水は樂しげに吾を迎へて歌ふ。吁、樂しかりし今日の旅、げにうれしきものは旅なるかな。(完)

機動演習參加の記

我等曩きに敦賀金山聯隊に練兵を見學して得る所少しとせず歸校以來自強益々勇を鼓し學に勉め業を習ひ以て陋を釋て精に就き孜々汲々たる者は旬日、今又好機到來す何ぞや機動演習に參加するを得たる、則ち是也。

是より先き第十六師團長長岡中將閣下より本校執銃生徒部隊に對し都合によりて今度の秋季機動演習に參加

する事を許可すとの報、達せしかば、我校にては、是こそ渡りに船なり我より囑望することも尙かゝる好機は得らるべき者に非ず宜しく平常の教練を實際に経験すべしとて早速願ひ出でたり。

されど不幸なる哉未だ第四年級に對し一般中隊教練を教習し非ざれば甚だ解決に苦まれしも好機逸すべからず空前の舉なればとて愈々参加すべく決しぬ。

かくて俄仕立乍ら師も生徒も共に流汗涔々一通りの教練をうけしは實に秋空高き十一月三日臣子として忘るべからざる 先帝御降誕の當日の事なりき。

明くれば四日午前八時一同學校に集合し身は出陣に扮して號令を待つ、時に校長殿の訓示に曰く「諸子は今回かくの如き好機を得たるなればよく平素の訓練する眞價を發揮して仆れて后止むの精神を以て出陣せよ諸子の名譽は則ち本校の名譽なり豈獨り本校のそれのみかは、是を以て他の學校の如何をも推測せられぬべしその責又重且大ならずや」と半言隻句皆骨髓に徹せず

而して南軍本隊の一部隊として北進すべし」とこゝに我南軍とは伏見歩兵第三十八聯隊の謂にして敵北軍は奈良歩兵第五十三聯隊とかや應て父とし崇む中隊長田澤少尉殿を得て我等は純然たる軍人とはなりにけりかくて

第一小隊長 井 實 弘

第二小隊長 鹿 苑 慈 教

第三小隊長 神 口 權 八

の任命ありて愈々八日市町を北に縫ひぬ、あゝ我等思ひみれば去る日敦賀にて關中佐殿が曰はるゝ様「劍の切先には無限の權力がある」と今や幾萬の壯士は長官の一指揮によりて動きつゝあるなり進みては止まり止まりては行く程に漸く日影くらくなりて一同五個莊村に晩食をなし休息する事約二時間

北進又北進我等本隊は先驅の占領せる土地を歩むが故に割合に勞力少なきも若しさらばとならんか忽ち援兵すべき覺悟を以て進みぬされば責任や又大なり。

と云ふ事なし、次で池田教官よりも注意あり「諸子の經驗せる所謂發火演習なるものは則ちまゝ事なり此度の演習参加は實に眞の戦争なり故に注意の上にも注意し層一層の努力なくんばあるべからず方に寡言實行ならん事を切に望む」と又よく感銘する所たり其他綿密なる注意訓旨をうけ正々堂々歩調今更に勇ましく校門を去りて彦根停車場にと急ぎぬ。

人員 五年 甲組 三三人

四年 甲組 四二人

乙組 三三人

乙組 三九人

一四七人

かくて第九時四十分近江線にうち乗り歡呼の聲に送られて出陣せし我壯士の心事血湧き肉躍りてよく筆につくし難しやがて八日市驛に下車して晝食をすまし令を待つ事しばらくにして本中隊を特に彦根中隊と命名す

かくて翌日午前二時頃には葛籠町の某寺に警急舍營をなして暫し夢みる暇もなく愈戰闘準備の本命は下りぬいでや目醒ましき活動ぶりを敵に御覽んせんとして中隊長殿の指揮のまにゝ右往左往、道なき道をたどりつゝ或いは斥候を出し或は傳令をつかはし益々多事ならんとす。

かくて我等は進みに進みて連絡をたらしよと思ふ暇もあらばこそ敵兵一時に堤上にあらはれて我中隊を包圍しぬ、あゝ無念や此時我に義家が過雁亂行の兵法を知らしめんか、かゝる手落ちもなからんに加之に蚩蚩蟻子の援だにな只切齒扼腕するの外なし、されど男子、むざゝ死すべきにあらずよく死力を竭して遂には吶喊一聲敵陣に突進せり。

嗚呼かくて彦根中隊は全滅しぬ、後しはらくにして高宮河原に休戦喇叭の音囀唳として轟き渡りぬ。

是より講評ありて西川旅團長閣下の云はるゝ様「彦根中隊の元氣溢るゝ可りなるは感心の外なし只その元氣

にかられてや、輕卒に行動せしは僅なりき」とついで長岡師團長閣下よりも同様の話あり「今日の戦闘は古のど變り共同一致して敵に當るべき者なり元氣にはやりて突進しすぎたるは今后戒むべき事なり」と我等も自ら痛切に感じたるは共同一致の偉大なる効果ある事なり實に

天時不如地利地利不如人和也

かくて戦局を上げて先きに觀戰せる一、二、三、年級と諸共に疲勞忘れて歸校せしは五日正午なりきあゝかくて彦根中隊は全滅しぬされど五百の健兒は落膽失望する勿れ罪かならずしも獨り我にあらず況んや又失敗は成功の基たるをや益々元氣の旺盛ならん事を望んで自重以て事に當れ然らば恐らくは後顧の憂なからん。たとひ今や全滅せしと雖も、最後の勝利を期して待つべし希くば彌々元氣を發起せよ彦陽の男兒。

是を以て機動演習參加記行となす、只筆端意のまゝならざるを愧づるのみ

南山

謝恩會、祝賀會之記 (於本校)

大正二年九月七日

開會の辭

太田有秋氏

諸君こゝに平瀬先生を始め坂、池田、堀、三先生及木川書記殿に對する祝賀會及謝恩會を開く運びになりました事は、誠に一同の欣喜する所であります。

それにつきまして是が由來を少々御話して、開會の辭にかへたいと思ふのであります。

諸君昨年平瀬先生は多年御研鑽の結果として、學士院會より御授賞になりました所の事實は、既に當時新聞紙上で承知致しました。是を動機としまして、我々が久しく先生の御訓育を受け申した事等、むら／＼と湧き出でましたものですから、一度母校なる彦根中學校に卒業生の集合を願つて皆々様と共に祝賀會を開かうと幹事の方で彼是してゐる間に、明治天皇の御登駕に逢ひ、世は諒闇に閉され萬事、謹慎と云ふ事になりました

したが、越えて本年八月世は大正の新時代に入りましたので、期逸すべからずとて、平瀬先生及坂、堀、池田、木川四先生の十年勤續謝恩祝賀會を本日九月七日に開くに到りました。

それに就いて、御多事中に諸君の御光來に預り誠に感謝に堪えぬのであります。是を以て永遠に記念せん事をば又一重に希望し以て開會の辭と致します。

祝賀の辭

廣田平五郎氏

私は幹事でも何でもありませんが、祝賀の辭をあげよとの御話で御座いますから訥辭をも願みず此の盛會に出づるを得ましたのは誠に光榮であります。

さて恩師平瀬先生は銀杏に關する大論文を提出になりました、昨年五月十二日に帝國學士會から、立派なる新なる學籍を表はしたとの件により、賞與になつたと云ふ事であります。

抑も今日の狀態は知りませんが、我が校は仲々に教育

に困難な學校でありました。我々が誠に横着を極めましたので殆んど諸先生にも閉口せられた事であらうと今更罪を謝す次第でありますが、其の當時、平瀬先生の如き大先生があらましたために、克く我々を導き下さつたのであります。ついで坂、池田、堀三先生にも既に十年以上の御勤續になつてゐるのであります。實に十年一と昔と云ふに先生等は十年一日の如く御教育になつてゐる事に對し、厚く一同に代つて御禮申す次第であります。又木川書記殿には既に我々が在校時代から御勤務になり、本校の爲めに盡力せられつゝある事に對しても、誠に感謝に堪えぬのであります。之を以て祝賀の辭にかへます。

謝恩の辭

藤田義亮氏

諒闇の爲めに、我等のかねて希望せる謝恩會が今日迄延引しました事は、皆々様に對して相濟まぬ事であります。仍て私は社會の一部分に職責を盡してゐる者で

ありますが、皆自ら立ち自ら養ふて自ら大きくなつた様に思つてゐます。然し乍ら願れば實に此の中學に學んだ御陰である。今我々の前に御出でになる恩師の御陰でないものは一もないのであります。然るに忘恩に暮し勝ちの我等は稍ともすれば諸先生の蔭を踏む様な事があるので、誠に心外な事でありました。山より高き海よりも深き師の恩、師の恵みを忘れてはならんが故に、此處に舊師弟の恩情愛益々深からん事を希ふ次第であります。

記念品捧呈

恩師案内者 太田 有 秋氏
捧 呈 者 成宮 市 太郎氏

嗚呼舊師の面影、十年の昔に異ならず卒業生諸氏皆眞髓の赤心を以て是に感佩し、贈るに記念品を以てす。亦美なるる哉師弟の情、永へに記念すべきは今日の事也。

演 說

學校長 小早川 潔氏

本日は我が彦根中學校卒業生諸君によつて平瀬前先生の祝賀會及坂、堀、池田、木川四君の謝恩會を開かれまするに付きまして、自分も本校の職員として此の盛典に列するの榮を得たのであります。

扱て近頃は何々祝賀會とか、何々謝恩會とか云つて頻々諸方に行はれます。是最も賞すべき事とは云ひ乍ら中には只流行を追ひ奢侈を事とし徒らに牛飲馬食の行はるゝ者も少くないと云ふ事を聞いてゐます。

然るに本校に本日開會せらるゝ所は是等と雲泥の差がありまして私も之に賛成し、之に祝意を表するに躊躇しないのであります。

其故は云ふに聞く所によれば平瀬君は本校に七年間就職せられて御出でになり、今や其名も榮なる帝國學士會より大發明に關して受賞せられたる事なれば、苟も卒業生として恩師の事を祝するは、寧ろ當然であり

ます。殊に母校にかゝる世界的人物が出たと云ふは世人に對しても肩身の廣い事であると考へます。仍て本校の創立は既に諸君が御承知の通り古いのであつて二十年間に十人の校長、壹百何十名と云ふ職員の更迭があるだけでも推知せらるゝが如く仲々整いにくい學校たるにも係はらず、四君が十年一日の如く勤務せられたる、その勞や、その功や大なりと云ふべきであると考へます、故に之に對し彼によつて、謝恩、祝賀の禮を盡すこともすこぶる結構な事と思ふのであります。之を以て祝辭にかへます。

演 說

大阪 橋本 二郎氏

私は去る明治三十二年本校を卒業した一人でありまして、只今大阪に職を奉じて居ります。今日四先生の謝恩會、平瀬先生の謝恩祝賀會が開催せられると云ふので、實に恩師に報ゆべき好機逸すべからずと思ひまして、早速駆けつけて來たのであります。

回顧すれば我々が恩師平瀬先生の薫陶を受けた事は長い事でありました。當時先生は學事研究に御熱心でありました事は、實に今私の喋々を俟たないのであります。我々が只今社會に立つてゐる事の出来るのは則ち誠心あるからでありまして、その誠心たるや、即ち先生の賜たるを疑はないのであります。

然る所昨年新紙の報する所により平瀬先生の大名譽を獲られました事を容易に承知致しました、其時は恰も我々が受賞したかの如くに手の舞ひ足の踏む所を知らなかつたのであります。而して謝恩の念去りやらず今や之が祝賀を併せて、此處になつかしき母校に於て、なつかしき舊師の尊顔を拜するを得たるをば、誠に喜ぶ次第であります。

扱て我々の在校の當時は先生達にも席温かならずして去らるゝ事多くして、仲々弟、師の親情も通じなかつたがこゝに御列席の三先生は既に十ヶ年が間本校に職を執りになり懇切なる御教育を施さるゝのであります。

して今日の在校生諸子は誠に結構であります、實に美望の至りでありませんか。

又木川書記殿に於ても我々在校當時に少しも變りなく十年一日の御勤務に對して、何と云ふて可いか謝辭がないのであります。

遡りまして、平瀬先生の名聲は噴々として世界に知れ渡りまして、今更喋々を待たないのであります、只謝恩の念湧き出る物から黙止し難く、こゝに感謝の意を表した迄の事であります。希くば平瀬先生及四先生の將來益々御壯健に本校の爲めに、はた帝國のためにつくされん事を祈るのであります。

答 辭

四先生代理 坂 廣氏

本日は我々のために、瑣々たる十年勤績を徳とし、此處にかゝる盛大なる式典を擧げて下さつた事に對して感謝にたえません。尙其上に記念品の贈呈に預りました、折角の思召の事なれば、遠慮もなく頂戴します。

只此上は之を永く記念して及ばず乍ら益々奮發する心組であります。一同に代りまして先づ御禮迄に申し上げます。

答 辭

平瀬作五郎氏

今日の祝典は私にとつて意外でありました。實は御手紙を享けまして、私は休暇でもあるし、昔の學校でもあるし、殊に卒業生等の古い御顔を見て、昔話でもしたいから幸ひだと思ひまして、やつて來ますと、本日は別して、坂先生を始め四人様の御祝典を擧げられまして其内に、私迄も入れられると云ふは誠に有難い事です。所で實は本日は別に御話の材料も御座いませす銀杏の標本等も御目に掛けられたとは思ひましたが、ついポケットに入りにくい等云ふ所から内に置いて來たと云ふ様な始末で甚だ不都合でございました。兎角かうやつて卒業生等の御顔を見ますれば、到底見覺えもない人々が澤山ある様ですが、只今の通り連名

簿を見ては、あゝあの人は當時ボートをやリ、テニスの人であつたなあ等と思ひ浮べました。

さて是からざつと銀杏の話でもしてみませう。私の大學に就職してゐましたことは古い事で、其頃は矢武先生が教授でありましたが、植物の畫等をかく事が甚だ不器用でありましたもの故植物らしい畫を書いて呉れ等とよく笑はれた物です。それで松村さんの御勸めで少々とは云へ、月給を貰ひ乍ら教へてもらへると云ふ様な僥倖の時を得たのであります。

さて、素鐵に關してマンザラ西洋人が知らなかつたかと云ふに、こゝう云ふ事もヨーロッパでは既に研究してあつたのですが六ヶ敷くゝと云ふことでしたから、一つ銀杏の研究を日本でやつたらどうだとの話、當時是も獨逸には研究されてゐました。が實物が少いので出來かねて痒い處へ手が届かぬ程には達してゐたのでありません。そこで池野さんが目をつけて居られましたから、そろ／＼と慰み半分にやりかけました。當時ド

イツ人ストラスブルグ氏は矢張りその研究をやつてゐられましたが、仲々器用な人でしたが研究するにつれて此人の手の届かない所へチク／＼達する様になつて參りましたのです。一体、ストラスブルグ氏は前に云つた通り、器用手ですから一耗の百分の一程の薄い木片迄も手の先で拵えられたのです。然るに我々は不器用故機械の力を使はねばなりません。所が西洋剃刀等は研いだ事ありません。元來私は子供の時分から口鬚が生えましたから日本剃刀なら始終どぎなれてゐますから、是でやつて見やうと研究の結果旨い事ゆき、其上ストラスブルグ氏のせられる時の様に、端が出來て數へ違へたり、失つたりする事はなくて立派に出來ますから、早速之を氏にも知らしてやりました。今でもその剃刀が大學に残されてあるそうです。そんな状態で池野さんは手を出しかねたのでせうが四年程立ちますと、ストラスブルグ氏のは大分違つた所を發見する様になり、松室先生によつて發表せられま

た。

只此處に銀杏は脊が高く段々調べて見ると二百十日から二十日迄に私の調べる物が到達するので植物園の園丁に頼めば、もぎ取つて來て折角だが良結果を得ますまいと思つて私は一々もぎるために漸く木に昇つたのでありました。

實は池野さんは、木登りが不器用でした私は子供の時分に木昇りが好きで杏などをちぎる爲に上るものだから、着物の前は非常にすれ破れてあつたのです。

所が素鐵は九州、銀杏は此の地方が主だから西洋人に先をこられる事はないから悠々考へ様と思ひましてツイト、此の様になりましたのは、鬚や子供時代の木のはり等が動機になつたのです。

さて下等と高等との植物の間には高等は花粉下等ののは精虫によつて繁殖する物ではあるが其の是等の中には必ずや混俗があつて、高等に屬するものであり乍ら精虫で繁殖してゐる者があるだらうとの疑はどこにもあ

しつた物です。

因て私が精虫を見たのは一月でしたが是は深く秘して誰にも云はなかつたが、只松村さんには知らして置かないと悪いから、之をつげをき九月迄研究して論文を出したのであります。所がドイツ人レイル氏は早速之を國の友人に知らしてやりました。するとドイツ人否西洋人等は一般日本人を侮辱してゐやがつてその返事にはどうですか、水虫等を見て日本人が大騒をやつてゐるか等云つて、私は發見のためにかく名が著はれたのではなくて、カ様に思はれた点から反つて有名になつた者でせう。

元來前に云つた様に植物學には門外漢で僥倖によつたのであります、省れば鬚をそる事や木登りが動機となつてかく受賞するに到つたのは誠に多分に存するので御座います。

只ご迄も身体が丈夫なのが第一でありまして、是には運動が入用です。先刻も相變らずと云はれましたが

祝電

大坂 村山千太郎氏

ヒラセシノエイヨヲガシバンイケダホリキガワシニシ
ンシヤス

小樽 川崎長一氏

セイカイヲシクシアハセテ五センセイノゴケンコウヲ
イノル

大津 藪田勘兵衛氏

コンニチノシユクガシヤオンカイニマンクウノエイヨ
ヲヒヨウス

時に城山の思出深き鐘四時を報ず。

ついで記念のため撮影

引ついで宴會にうつる。

及び畫ハガキ發行、恩師の姿を寫して

以上記者大杉南山

一〇五

閉會の辭

室谷喬三氏

昔にかはらず、平瀬先生の御懇篤なる御話及皆様の御話を聞かしまして、感謝に堪へぬのであります。

どうか恩師及卒業生諸君の健在を希望します。是を以て閉會とします。



東宮殿下行啓記念武術大會

今や炎帝駕を遠ざけ、金風颯々として梧葉既に聲あり
燕子南に去りて、雁王北に來り、白帝節を知る候とな
り、茲に三度行啓の記念日を迎ふることとなりぬ。回
顧すれば四年前畏くも東宮殿下には鶴駕を我校に枉げ
させ給ひ内は教室内の實況を憐はせ給ひ外は折からの
降雨をも厭ひ給はず我兵式体操を御覽せられしは實に
殿下聰明敏智に渡らせられ教育普及に御意を注がせ給

ふの深きに依るものにして生等の共に恐懼感激に堪へ
ざる所なり。嗚呼何を以て鴻恩の萬分の一に報ふべき
唯聖旨を奉體し益々發奮激勵各其身神を練磨し富國強
兵の策を圖り進で皇威を發揚し列聖撫育の太恩に報ひ
奉らんのみ。今靜に世界の趨勢を鑑みるに、轉た痛心
に堪へざるものあり。列強相競うて爪を磨し牙を礪ぎ
虎視眈々たり。陽に平和を裝ひ、陰に攘奪を圖る。一
歩を誤るときは忽ち乗せられんとする勢あり。
嗚呼我等第二の國民たるものゝ責任や實に至大ならず

哉、我社稷を富嶽の安に致すと否とは誠に諸子等が双
肩に在り。若し國民一致協力し出で、は東雲を拂ひ西
霧を排し入りては自己充實主義即ち物質的獨立主義を
固守し盡忠報國の精神を厚し富國強兵の策を圖らずん
ば隣邦支那の如き運命に陥るも計り難し。

されども我等學生たるもの徒に過大の望みを持し近き
務を怠らんか之鴻恩に報ゆる所以にあらず益々智能を
啓發し体軀を鍛へる事こそ肝要なれ。國家の基礎たる
國民にして腕は腰間の秋水を使ふに足らず身は一人の
敵を斃すに足らずんば一朝有事の秋寧ぞ義勇奉公の實
を全うするを得ん哉。學界實業界等平和の戰爭にあり
ても其意のまゝに己が技能を發揮せんには体格養成に
努めざるべからず。而て我武術は古來身体發育に貢獻
し又精神界に於て最も我が誇とする武士道の如きは實
に武術の我等に與へし賜にして武術の盛否は國家の隆
退に關する事多大なり。斯故に我部は此由緒深き光榮
ある本日として臨時武術大會を催し行啓の榮を記念

すると共に又以て彦中の士氣を鼓舞し益々其健康を増
進し他日各自が奉公の實を全するを得せしめ聊か鴻恩
に報ゆるの微衷を致さんとす。
而て我が健兒諸君が意氣の壯なる其武者振昔時の赤鬼
に勝ることも劣らず本會をして實に盛大に終らしめられ
しは我部の深く感謝する所なり。

茲に本記念大會の結果を録して以て記念に資せん。

大正二年十月八日 劍道部 G K 生

劍道一本仕合番組

紅 軍		白 軍	
丹下 清 藏		齋 藤 治 雄	
安 田 紫 雲		北 川 秀 明	
井 關 丹 三		滿 島 文 太郎	
淺 岡 藤 次 郎		西 澤 藤 太 郎	
竹 中 貞 男		夏 川 協 太 郎	
大 清 水 教 宣		竹 岡 弘 澄	
稻 山 益 男		芝 井	

田中仙太郎 奥井武一 大平佐一郎 大橋英次郎 岡村五郎 伊之坂三州 小村貞次郎 大鳥居武彦 山川秀二 田中與惣彌 瀨川幸造 遠藤太造 藤田文藏 池山秀雄 堤本 坂東久太郎 細矢信一郎

成宮嘉藏 瀧谷武男 常喜郁郎 德永徹照 田中清太郎 山本秀雄 渡邊勝己 西川文吉 北村延藏 吉田廣次郎 岡田了熙 宇津木幹也 坂村小二郎 藤村小末吉 花本末吉 長屋 皆木 覺

音羽啓真 清水教興 堀部實 熊澤宰一郎 若林繁藏 伊藤大三 小島新二郎 谷村森太郎 久木傳右衛門 末松秀雄 片野金三 村谷顯一 小森敏夫 上田與三郎 山根令吉 井上新一 橋本正治

山口廣吉 横山圓次 藤田佐一 久木嘉三 佐々木正樹 廣瀬連磨 三木洪久雄 木村 馨 野瀬房雄 松村黃次郎 馬場信弘 奥村義輔 前川榮一 山本三郎 幸島貞一 廣野錦一郎 藤村貞五郎

吉田眞雄 杉本元三 椿居五郎 秋口喜代次郎 野田昌也 北村武三 正田源一郎 西村賢造 中田清次郎 山本十二郎 野瀬澄圓 岡野清 中澤潔 角田與市 三越幾太郎 久德音一郎 朝比奈敬三

木村正治 小菅愛三 西村信治 小野精一 寺村和一 新庄了觀 大久保定武 石原與四郎 宇野聖賢 西部 昊 新野太郎 明塚德三郎 土田長四郎 阪本眞一 石田貫一 谷田二郎 清水彌三郎

木下助三郎 相場榮藏 後藤嘉夫 矢島知秀 澤純三 衣斐申造 大日方重隆 西村彦右衛門 崎山慶三 熊谷讓 蒲山元紀 山田信義 安部拾藏 副將 淺見市太郎 大將 神口權八

塩谷彰雄 小林茂雄 村瀬榮一郎 内片義信 樋口勝治良 樋口敏雄 宮尾源一郎 山田亮吉 前川宗太郎 岩崎甲藏 鹿苑慈教 村田信一 野坂太造 竹内勝三 副將 山田信太郎 大將

從軍記者録す「行啓記念式を終へ試合を始めしは午前
十時、白軍東山に陣すれば紅軍西山に屯し、旗鼓堂々

全軍を進め齊藤、丹下の二騎先ず戦を開く。「我こそは關東男兒平家の者共にひけをとては末代の恥、一撃に滅さん」と息巻きつ、太刀風鋭く切り込みて見る見る内に六人の敵を見事切り斃し、功勞たてしは北川なり。

されど赤にも豪のもの一騎「我は是れ平家の家臣大平と申す者いで御參なれ」と聲もろともに切り込む太刀を北川も受けとめ「ちり／＼と退くも今は疲れ果て空しく露と消えて後松風の音颯々たり。

時に紅軍の勇士多く斃れ見るも哀はそいしか觀客手に汗を握りしめ「赤シツカリ」の聲喧然暫しは止むべうも見えざりき。忽然赤の武者三騎遠藤、藤田、坂東、物をも云はず走り來て白軍の陣中へぞとつと切り入りければ名に負ふ源家の武夫もうき足たちて逐ひまくられ、形勢非なるを見て取りて「抑我こそは源家の重臣成宮嘉藏なりいで一泡吹かしくれん」と太刀取り直し眞向にかざす劔の鋭さにさしもの平氏の剛の者も退き

し姿の勇ましけれ。

いざ最後の合戦と決死の士とつと切り込めば流石の源氏も切りたてられ斃るゝものは數知れず。されども衆寡敵し難く蒲山、山田、安部等赤の一騎當千の士は皆數人を斃してまた倒れ残るは僅に大將のみ。赤の大將は此を見て今は全軍の勝敗の境と猛虎の勢を以て敵を靡け當るを幸切り倒し遂に兩將雌雄を決するに至れり白の大將は名にし負ふ剛の者少しも騒ずじり／＼と進み紅軍の將もまた劣らじと互に氣合を掛くる事暫し、此ぞ天下別けめの關ヶ原と雙方秘術を盡しつゝ一進一退エィ、ヤエィ、結ぶ太刀數、數合哀れ紅軍の大將は數度の戦に腕も疲れ踏込む足も次第に亂れ行途に勝を白に譲りて逝きぬ。片割月は松の梢に掛り吹く松風の音寒く過雁、一行また哀れなり。(神口生)



つ進みつエィ、ヤ、エィ引くなよ進めと氣を勵し火花は空に飛び散りて折から來る夕立に靡き亂しナデシコの何れが敵とも見分け難かりける。時しもあれや暗雲東天に滿ち一陣の強風吹き荒み、白軍之に乗ずれば紅軍はか弱き身のナデシコの赤き心は琵琶の湖劣らぬ深さは胸にあれど大勢如何ともすべからず、紅軍は一先退きける。大將が心の中こそ如何ならん。勇氣を鼓舞し紅軍は岡野、角田、久徳等を先にたて猛烈に逆襲すれば白もまた西村、土田、阪本等こゝをせんと戦ひければ亦もや赤は退きぬ。生き残りしは僅に五騎。觀客紅軍の形勢非なるに堪え兼ねて聲を振上げ立ちあがり「紅シツカリ、敵多しとて恐るゝな勵め／＼」と萬雷の一時に落つるかどばかりに聞きなされ滿堂爲めに動搖せり。赤は大將副將を初めとし宗徒の輩もろどもにいざ十重二十重の此圍破り得ば再興の計を建つる望あり、若し武運つたなく敗戦せばそれまで心に残す事もなし。と取る水杯もこそ／＼に馬に跨り泰然と構へ

行啓紀念武術大會

大正二年十月八日

紀念すべき十月八日！三星霜の昔、頃は我校庭の優麗なるコスモスの雨中に美を競ひたりし今日、畏くも今上天皇陛下の未だ東宮にて在らせ給ひし時親しく本校に行啓遊ばされしなり。これ千歳一遇の慶事にして本校空前の盛典なり。故に茲に光榮ある行啓紀念日をトし武術大會を開催して齊しく今上陛下の萬歳を祈り奉りしなり。無心の雨すら紀念日を忘れざりけむか將た天は印象深き雨を降らせしか。爲に臨時屋外道場その用なく、柔道は本道場にて劍道は生徒控所にて演武することなれり。共に盛會を極め日頃鍛錬せし手腕を遺憾なく發揮せるを觀ては快感禁する能はざるものありき。

柔道部

紅白兩軍對陣して、二百に垂んとする勇士の互に鎬を

削りて戦ふ様左の如し。

(勝負一本。時間三分)

紅軍 白軍

木村忠一 片岡和夫
藤居二郎 張俊雨
西川庄五郎 成宮喜造
山口保雄 大久保進一
蒲山一雄 日夏友次郎
中川文造 糸田教順
山田典城 富田亮
宮本東三 東野義一
若林太良平 横田清
北澤龍藏 中川勇
中居正治 丸本三郎
木俣守一 中村仁三郎
市毛國範 寺田奎太
馬淵明 北川彌太郎

辻茂三 坂安彦
角田新三 松岡源之真
布本義道 川合常吉
原健三 山田雄吉
松川武吉 松岡源之真
松吉佐助 山田雄吉
文室康男 藤本弘次郎
土川易次郎 美濃部住雄
仙波健 尾原田多郎
西澤久一郎 中村重憲
谷田又四郎 加納喜三郎
西村鶴太郎 北村彦一郎
辻傳次郎 金森武雄
安澤新太郎 杉立龜之丞
野田三平 西田庄之助
谷田又四郎 近澤萬次郎
安澤新太郎 西田庄之助

北川孝道 上田甚之助
小林重藏 黒田利三郎
寺島幸助 青谷良三
佐成篤三郎 中田英次
澤憲太郎 田附信次郎
山岡秀雄 瀧谷德乘
勝馬孝造 馬場孝三
西村弘 吉田精一
谷口惣次郎 藤澤謙有
豐満春了 磯崎文彌
端宏郎 宮村弘
田附武 磯崎文彌
住井富士雄 高田信義
中村太四郎 中川平太郎
角田力藏 西村正雄
鶴岡文治郎 坂安彦
宮内政太郎 加藤彦次郎

(晝食)

森猶一 杉立龜之丞
藤原彌一郎 高務隆音
今宿秦三 平田覺真
福原九左右門 松宮孫十郎
澤田義重 加藤彦次郎
西川兵次郎 土田精一郎
古川源五郎 上田重三
長尾慈雲 山本博
久米建次
村岸新六 河北寛治
熊木九郎 西澤良一
三露英之助 青柳宏宣
野矢信三 横居祐三
尾原亮證 小林鐵三
北川洋次郎 夏原勘三
谷原惠性